

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2020



所 属： 人文学科 キャリア・イングリッシュ専攻

名 前： 松本 充右

作成日：2020 年 8 月 31 日

九州ルーテル学院大学 ティーチング・ポートフォリオ（案）

教員氏名：松本充右

所属：人文学部 人文学科 キャリア・イングリッシュ専攻

1. はじめに

昨今、大学の教育については単位の実質化や教育の質の保障と教育成果の公表など、自らの教育に対するさらなる責任や外部に向けての説明が求められている。大学の教員の職務には教育、研究、学内業務など様々な役割があるが、かつて大学教員は研究者としての研究業績や論文数で評価されることが多く、教育については講義内容、使用教科書の選定など、教員の裁量のもとで比較的自由に教育が行われてきた。また多くの大学では学生による授業評価を行なっているが、授業の内容についての経年的な変化について授業評価だけで検討することは難しくなっている。ティーチング・ポートフォリオを作成することで、教員自らがシラバスや学生からの授業評価に加えて教育に対する取り組みや成果など教育活動全般について網羅的にまとめることができるメリットがある。以上を踏まえ、九州ルーテル学院大学では 2020 年度から専任教員においては教員個別のティーチング・ポートフォリオを作成することとする。

2. 教育の責任

九州ルーテル学院大学での私の教育責任は人文学科キャリア・イングリッシュ専攻における専門科目と共通教育科目の担当である。また 2018 年度は人文学科長として人文学科の教育、2019 年度は学務入試センター長として学部全体の教育の運営、また 2020 年度からは教務担当副学長として大学教育実施の統括を行なっている。

2.1. 授業科目の担当

2018 年～2020 年度の 3 年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
グローバル・スタディーズ	2018－2019 前期	平均 170 人	共通教育必修
英語 II	2018 後期	15 人	共通教育必修
フレッシュマン・ゼミ	2019－2020 前期	10 名	共通教育必修
異文化圏体験学修	2018－2019 前後期	平均 8 名	共通教育選択
海外留学 A,B,C	2018－2019 前後期	平均 2 名	共通教育選択
日英語比較	2018－2020 前期	平均 30 名	キャリア・イングリッシュ専攻専門選択
英語学概論	2020 年度後期	35 人	キャリア・イングリッシュ専攻専門選択
リーディング＆ライティング演習 I	2020 年度前期	22 人	キャリア・イングリッシュ専攻専門必修
小学校英語ワールドワーク I・II	2018－2020 前後期	7 名	キャリア・イングリッシュ専攻専門選択
小学校英語 (旧：小学校英語指導者原論)	2018－2020 後期	平均 35 名	キャリア・イングリッシュ専攻専門選択・こども専攻専門選択
英語科教育実習 I	2018－2020 後期	平均 25 名	教職必修
特別研究	2018－2020 後期	平均 8 名	キャリア・イングリッシュ専攻専門必修
卒業研究	2018－2020 前後期	平均 8 名	キャリア・イングリッシュ専攻専門必修

教育を担当する科目は共通教育科目、キャリア・イングリッシュ専攻専門科目、教職科目となっているが、そのうち、2019 年度までは 1 年次人文学科、心理臨床学科の共通教

育必修科目の「グローバル・スタディーズ」と同選択科目「異文化圏体験学修」を長く担当した。2020 年度からは上記に代わり以前担当していた「リーディング&ライティング演習 I」、「英語学概論」を担当している。また小学校外国語関係として「小学校英語」、「小学校英語フィールドワーク I・II」も長く担当している。

■ 主要担当科目

「リーディング&ライティング演習 I」

人文学科キャリア・イングリッシュ専攻の 1・2 年次の中心的な科目の一つであり、日本人英語教員が主に英語の「読むこと」と「書くこと」に特化して週 2 回指導する科目である。「読むこと」と「書くこと」が中心となるが、TOEIC の問題に準じた課題を行う際には英語のリスニング教材も使用し、英語 4 技能を総合的に指導している。また、学期終わりに学内 TOEIC 試験を受験してもらい、評価の一部として使う他、英語のリーディング能力の向上を数値化することで学修者の動機付けとしても利用している。

「日英語比較」

2 年次の「英語学概論」の発展として日本語と英語を音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、社会言語学の観点から比較分析する科目である。母語である日本語を英語と比較することで無意識に使用している日本語にも様々な言語学的制約や規則が存在していることに気がついてもらい言葉の複雑さと豊かさを実感してもらうことも目標としている。

「小学校英語フィールドワーク I・II」

2 年次の「小学校英語」で学修した小学校外国語活動（外国語科）の目的や指導理論を教育の現場で実践することを通じて、効果的な小学校での英語指導法の修得を目標にしている。受講者は座学に加えて、菊陽町立小学校の外国語活動や小学校外国語科に T2 として参加し、児童に指導する経験を通して、指導上の課題を見つけ、その解決方法について検討を行う。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

- 2019 年 6 月 14 日熊本商業高校での「人文学と言語学」の講義 2 年生 15 人
人文学と社会科学、自然科学の違い、言語学からみた母語の獲得と外国語の違いについての講義
- 非常勤講師
熊本大学教養教育「英語 A」「英語 B」（～2020 年度）

必修英語として英語リスニングと英語リーディング・ライティングを担当

2.2. 教育組織運営

2019 年度は学務入試センター長、2020 年度からは教務担当副学長として学部教育編成およびに実施を統括している。2019 年度は熊本大学数理科学総合教育センターと協定を締結し、同センターから非常勤講師を招聘し 2020 年度から統計学を新規開講した。2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため 4 月に通常の開講ができず、急遽遠隔授業の実施のための作業班（WG）の座長として5月初旬からの遠隔授業の円滑な実施に努めた。課題となっている共通教育科目見直しの作業班（WG）を立ち上げ、座長として共通教育科目の見直しを行なっている。

3. 教育の理念

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々な場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には他者に感謝し、他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を4年間で行うことが本学の教育理念であると考えている。

3.1. 理念1 自ら思考し他者の意見も尊重しながら自己の意見を発言・発信できるスキルを身につける

母語である日本語でも外国語である英語であっても、自らの意見をしっかりと発言・発信できるための指導や教室環境が必要と考えている。これは私の米国留学での経験から起因しているが、米国の大学の授業では指名されていなくても教師の発言や説明に対して、疑問や意見がある場合、周りの空気を読まずに挙手をし、どんどん質問し、自らの意見をはっきりと述べる場面に数多く遭遇した。日本人は人前で発表・発言する訓練（パブリック・スピーキング）を受けていないため、発言を躊躇し、指名されても隣の友人に相談してから小声で自信なさげに答えることが多い。本学の授業の多くは少人数で行われることが多いため、他者の意見を尊重しつつも、自分の意見をはっきりと日本語でも英語でも発言・発信する機会を増やすことで、人前で発表・発言するスキルを向上させる教育を実践したいと考える。

3.2. 理念2 クリティカル・シンキングの思考スタイルを身につける

日本では空気を読むことが重要で、先生や上司から言われたことを素直に受け入れ、言われた通りすることが良く、また過剰な自己主張をしない価値観が評価される傾向がある。そのため、授業で教員が言った内容に異論があってもそのまま受け入れる学生が

多いように感じられる。他人の意見を尊重することが言うまでもなく大切であるが、学生時代に授業での教師の発言や説明に対して、疑問に思った場合は、自ら考えを巡らし、果たして本当であろうか、と疑って文献やインターネットで調べ真実を追求するクリティカル・シンキングを実行することが大切であると学生などには伝え、また教師としてはそのような姿勢を尊重して教育を行いたいと思っている。

3.3. 理念3 i+1の教材でチャレンジさせる

著名な第二言語習得論者である S・クラシェンが外国語習得に必要なインプットとして i+1 という定義を提案している。i は現在の外国語のレベルを指し、+1 はそれよりも少し難しいインプットを意味している。使用する教科書や教材が日本語で書かれたものであれ、英語であれ、可能な限り学生にとって難しくチャレンジできるものを使用するように心がけている。学生にとって多少歯応えがあり難しい教材を使用することで、教える側の教師も教わる側の学生も予習復習などが（特に英語で書かれている教材の場合は）大変になるが、学生の潜在能力を引き出すためにもやりがいのある教材にしっかりと取り組むことの方が学生の記憶にも留まり学習効果が高まると思っている。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

4.1. 英文で書かれたテキストや配布資料の使用

キャリア・イングリッシュ専攻の英語を学ぶ科目はもちろんのこと、言語学・英語学関係の専門科目においても可能な限り英語のテキストや教材を使用し専門的な内容も英語で読み理解できるようにチャレンジして欲しいと思っている。その際には英文教材を英文解釈する授業に終始してしまう危険性もあるため、「英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ」を意識し、英文教材をさらに細かく解説したパワーポイントのスライド資料を配布して理解が進むように配慮している。

4.2. 外国語の習得にはドリルの学修も必要

日本で外国語としての英語を学ぶ環境の場合、頻出表現や語彙を繰り返しドリル的に学ぶ必要も不可欠と考えている。そのため英語の基礎を学ぶ科目においては、暗記を伴う毎回の単語テストやクイズなどを繰り返すことで知識の定着を図ることを重視している。

4.3 動機付けを高めるストラテジー

学生の学びに向かう意欲をどのようにしたらより引き出せるかは、教師にとって大きな課題である。私が担当する科目は幸にしてその多くの科目において少人数のクラス

が多いため教師と学生との相互のやり取りを重視した教育の実施が可能である。そのため授業では学修内容について質疑したり、学生による発表やプレゼンテーションなどの発表を行い、能動的に授業に取り組み、学びに対して意欲を高めるような方法を多用するように心がけて指導し、学生の動機付けを高める工夫をしている。

5. 教育改善のための努力

5.1. 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善すべき点は真摯に学生の声に耳を傾け改善するようにしている。早口でわかりにくかった、パワーポイントのスライドの写真をスマホで撮っている学生がいて集中できなかった、などについては自分で気をつけて改善を心がけるようにし、授業実施の方法については、翌年度の最初の授業時に守るべき約束事をまとめた資料を配り、改善を徹底してきた。学生のコメントには的外れなコメントもあるが、教員が気がつかなかった意外な改善点を指摘されて眼から鱗の場合もある。改善すべきと思われることは授業改善報告書に記載し、翌年度に改善するようにしている。

5.2. 改善努力2

セミナーや学内FD・SDへの参加で情報収集

英語学関係の専門領域については、英語教育の学会に参加して、他の大学教員の実践的な研究の事例発表などを参考にし、自分の授業に生かせると思われる新しい研究成果を取り入れるようにしている。以前担当していた国際理解教育や留学関係の科目については、セミナーなどに参加できる機会があれば積極的に参加して、最新の情報を収集するようにしてきた。「異文化圏体験学修」では春休みにオーストラリアへの短期留学を希望する学生が急増したことを踏まえて、オーストラリア商務省が主催するセミナーに参加し、その際に西オーストラリア政府教育関係担当者と知り合ったことで、西オーストラリアのパスでの新しい異文化体験学修プログラムを開拓することができた。

6. 教育の成果・評価

- 「日英語比較」はカリキュラム上では2年次の「英語学概論」の応用という位置づけであり、英語学の基礎的な知識があるという前提で授業を進めてきたが、実際には英語学の主要な領域である、音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論について再度基本的な事柄から復習しながら授業を進めてきた。復習した上で、新たに日本語学と英語学の観点から検討するようにしたため、学生にとっては理解しやすかったようであり過去2年間の授業評価8項目ほぼ全ての項目で平均点を上回っている。

- 「小学校英語フィールドワーク」は菊陽町小学校外国語におけるボランティア活動が主要な内容であるため、その準備学習という色合いが強い。そのため、教科書を使っている教授法など理論的な内容と合わせて英語学修教材としての英語紙芝居やピクチャーカードの作成なども授業に取り入れている。授業評価は概ね平均以上の評価となっているが、2019年度後期の評価で新たに加わった課題など提出物の返却のスコアが著しく低かった。学期終わりのレポートに加えて、学期途中でも課題を与えて、コメントを付けて返却することが必要であると思っている。

7. 今後の教育に関する課題と目標

2020年度から1年次の英語科目「リーディング&ライティングI」を約7年ぶりに担当している。過去に担当していたが、改めて英語の基礎科目を担当すると、長年大学で英語を中心に教えてきたため、自分が英語と英語学の教師であることを実感した。留学やグローバル関係の科目の指導も魅力はあったが、やはり大学・大学院で専門としてきた英語を指導することにさらに注力していきたい。

- 2019年度までは別の教員が「英語学概論」を担当していたため、この2つの科目の内容には連続性がなかった。2020年度からは2年次の「英語学概論」も担当するため、今後は英語学関係専門科目の連続性の検討し、科目が有機的に繋がるように指導してゆきたい。
- 「小学校英語フィールドワーク」や「小学校英語」などでは、理論的な内容が中心となっているが、実際の児童英語の指導法を取り入れた授業を進める必要性が課題であると思っている。同僚のネイティブ教員の授業などを参考にして研鑽に努めたい。
- 「小学校英語フィールドワーク」では作成した教材を使って学生が実際にどのような指導を行なっているのかを巡回指導する必要があると感じているが、実際には巡回指導を十分に実施できていない。座学とフィールドワークの効果的な連続の観点から、今後は巡回指導を増やしていきたい。

8. 参考資料

- (1) 担当科目シラバス
- (2) 授業評価アンケート結果